外　来　語　批　判

——最近50年間の新聞資料の検討——

山田雄一郎・難波　恭子[1)]

（受付　1999年4月6日）

【論文の構成】

はじめに
第1章　外来語に関する記事の内容別分類と検討
第2章　外来語に関する記事の年代別分類と検討
おわりに
参考文献
資料一覧

は　じ　め　に

外来語，借用語，カタカナ語，あるいは和製英語などと呼ばれる舶来の言葉やその変異体が特にその勢力を増し始めたのは，日本の高度成長時代が始まった1960年代に符合するようである。本論文末尾の一覧資料においても確認できるように，外来語に関する記事や投書が新聞紙面を賑わせ始めたのもやはり60年代に入ってからである。その増加の傾向は，新聞以外にも，映画や音楽の世界，街頭の風景，日用品の名前などさまざまな分野において確認できる。たとえば60年代以降の小説作品をそれ以前のものと比べて見ると，ここでもまた，作品中のカタカナ表記の外来語の増加という形でこの傾向を裏づけることができる。著者のこれまでの調査[2)]による

1)　1999年広島修道大学人文学部英語英文科卒業。本論文で用いた新聞資料は，難波による卒業研究（「新聞記事に見られる日本人の外来語受容の変遷」）において使用したものを中心にしている。

2)　現在，明治期から今日までの，主として小説作品に現れる外来語の質的量的変化について調査をすすめている。これまで調べた作品数は約100点で，量的にはまだ不十分であるため公表には至っていないが，ここに述べたようなことは一般的な傾向として紹介できる段階まできている。

と，小説におけるこの種の言葉の10,000文字中の出現率は，50年代に比べ60年代ではほぼ2倍である。この増加傾向は，その後もとぎれることなく続いて今日に至っている。

こうした外来語は，いまではわれわれの日常生活に深く根を下ろしており，もはや，それらを用いずに言語生活を成り立たせるのは不可能と言ってもよい。われわれの日常に強く結び付いてきた外来語は，その量的質的変化の途上で，現れ方や使用法にこれまでにない特徴を見せるようになった。その特徴を集約的に述べるならば，日本語の中に相当する表現があるにもかかわらず，ことさら外国語のままカタカナで表記して使用するという今日的傾向である。当然のことながら，外国語のこうした受け入れ方は，日本語を使用する上で少なからぬ混乱を引き起こす。このため，外来語の氾濫を心配する向きの発言は，この点を中心に展開されることになる。同一の指示対象を在来の日本語と外来の言葉という二重の表現形式で取り扱おうというのだから，問題が生じないほうがおかしいのであろう。「言語の経済原則」から言っても，また，そのような大げさなことではなくごく当たり前に考えても，容器が二つあるのにそれに盛るべきものが一つでは，取り替えながら使うとしても容器の片方が常に一時的に不用となるのは明らかである。こうした不安定で不自然な状態がいつまでも続くはずはなく，結局，日本語に入ってきた外国語は，何とか自分が生き残る道を探ることになる。一般に，外国語が日本語の中で生き残るためには，四つの方法が用意されている。第一は，在来の語の中に相当する事物や概念が無かったり，適当な訳語が見あたらず最初から原音を移した形で表記される場合（e.g.「硝子／ガラス」,「アイデンティティ」など），第二は，既存の（訳）語を追い払ってそれにとって代わる場合（e.g.「写真機→カメラ」,「帳面→ノート」），第三は，意味上用法上の区別を曖昧にしたまま在来の語と共生する場合（e.g.「台所」と「キッチン」,「綿」と「コットン」），もう一つは，在来の語との間で意味上用法上の住み分けをする場合（e.g.「めし」と「ごはん」と「ライス」），である。これらのいずれにも参加できない，すなわ

ち外来語になりきれない外国語は，やがて日常の言語風景から消えていく運命にある。

外国語が日本語の中に根付くための四通りの過程のうち，第一と第四は，日本語を豊かにする原因と見なされることが多い。西洋文明の輸入に余念の無かった明治期の借用翻訳も含めて，第一類の外来語が日本人の生活に与えた影響は計り知れない。また，その結果として生まれた第四類，即ち日本語との意味上および用法上の住み分けを起こした外来語は，安定さえ得れば，それなりに有用な面を持つ。考え方によっては，この住み分けによって生まれた微妙な意味合いの変化が日本語に新しい豊かさを与えているとも言える。但し，この仲間は，日本語を母語としている人たちには何でもない問題でも，日本語を外から眺める立場の者にとっては厄介な問題を引き起こす。いま，日本語を外国語として学習している人たちが直面する困難の一つは，実は，この日本語と外来語の住み分けの結果から生じた問題なのである。この点は，例えば，P. モトワニの著した『日常外来語用法辞典』(1991) の序文においてよく示されている。この辞典は，日本語を学ぼうとする外国人が一様に驚く外来語の多さと，その用法の複雑さから来る混乱と困難を緩和する目的で編まれたもので，そこで提示されている主な問題は，次の二点に要約される。

(1) 日本語の中の外来語（この場合，カタカナ語）の安定度の判定

(2) 共生する和語，漢語，カタカナ語の区別

ここで指摘された二つの問題は，そのまま，これまでに見られる外来語批判に結びついている。このうち，本稿で論じようとしているのは，主として(1)の問題に関係している。それは，俗に「氾濫」と呼ばれるほどの外来語の流入の結果，不安定な状態のまま未だ住み分けの段階に至っていない言葉がまねく混乱の問題である。今日のようにあらゆるものの流動が激しい時代には，それに伴うことばの流入も，以前とは比較にならないほど多くなっている。一方，(2)は，住み分けが起こった場合を想定すれば良く，これ自体は日本語話者に痛痒を感じさせるものではない。モトワニは，特

に英語を話す者にとって混乱を生じさせる例として，同じ英語の 'stick' から生まれた「スティック」と「ステッキ」を，一方はホッケーなどのスポーツで用いられるものとして，他方は散歩などに用いられるものとして区別しなければならないこと，さらにこれらは老人や体の不自由な人が用いる場合に多く使われる「杖」とも使い分けなければならないことをあげている。同じような問題を含んでいる組合せは，これ以外にも，「ガラス」，「グラス」，「コップ」，「カップ」，「湯飲み」の間の区別など，例を挙げるのはさほど困難ではない。そうしてこれらの語は，いずれも日本語の中に安定した居場所を見出しているだけに，その使い分けの面倒は日本語を母語としている者にかえって気づかれにくいのである。そのために既に日本語の中で住み分けが起こっているこれらの語は，今日的意味での外来語批判において直接の対象として取り上げられることは少ないのである。

さて，ここまで，外来語批判を論じようと言いながら肝心の「外来語」を枠取りしないままに論を進めてきた。外来語に関する書物は，最初に「外来語とは何か」を説明するのが一般である。日本語の中の外来語は，歴史的に述べればなかなか複雑な構成になっているが，その種の説明はそれらの関連書物に譲るとして，この論文で意味する外来語は，単に「カタカナで表記された外国語起源のことば」と定める。よって，漢語は対象としないし，その他，外来語として意識されていないもの，例えばペルシャ語源の「無花果」が「イチジク」とカタカナで表記されているからといってこれを加えることもしない。それは，表題からも知れるように，最近50年間に新聞に現れた記事，論文，投書，報告などを資料とする関係上，そこで議論の対象となっている外来語，すなわち，その「氾濫」によって日本語と日本人に「混乱」をもたらすとして非難されるカタカナ表記の外来語を想定するのが妥当であろうと考えるからである。

以上の視点に立って，本研究では，日本における主要な全国紙のうち，『朝日新聞』と『日本経済新聞』の二紙を調査の対象とした。この二紙を選んだ理由は，われわれの調査可能な範囲で最もデータベースのしっかりし

たものであること，および，ことばに関連する記事の比較的多い新聞であることの二点である。調査は，『朝日新聞』の場合，「朝日新聞戦後50年史」のCD-ROM検索で1950年代から1990年代までの外来語・カタカナ語に関するすべての記事を収集することから始まった。また，『日本経済新聞』については，初めての縮刷版が発行された1959年4月から調査時点の1998年11月までが対象となっている。ただ，後者の場合，1959年4月から1983年末までの資料は，コンピューター検索ができなかったので，すべて手作業によっている。このように，収集上多少の不備はあったが，全体としては検討するのに十分な資料が入手できたと考えている。集まった資料を整理した結果，予想されたように，意見は肯定派と否定派に大別された。もちろん，どちらとも旗幟を鮮明にしない意見も少なからず認められるし，また，肯定派，否定派といってもその程度には違いが見られる。以下，本論においては，外来語批判の基軸をなす「否定派」の意見を中心として論を展開しながら，それに対する「肯定派」の意見がどのように提示される傾向があるかを整理して示したいと思う。外来語批判の流れをできるだけ分かりやすくつかむために，資料全体を，まず，内容別に分類して検討し，次に，年代別に分類することによって，外来語が日本の社会にどのように受け入れられてきたかを確認したい。

内容別分類については，資料を整理する過程で自然に次のように範疇化することができた。

1. 解説，その他一般的な記事
2. 是非論に関する記事
3. 公的機関等の決定・報告に関する記事

また，外来語の年代別変化については，これまで類似の研究報告がいくつかあるが，その中で経済上の発展・変化を基準にして比較的細かい年代区分を行っている米川（1996）を参考にした。それによると，次の五つに分けられる。

1. 1945年から1951年まで

2. 1952年から1959年まで
3. 1960年から1972年まで
4. 1973年から1982年まで
5. 1983年から現在まで

言うまでもなくことばの変化は，その性質上，どこまでも連続的であり，ここで示したような年代区分がそのまま正確な区分基準として認められるわけではない。しかし，今回収集された資料と，上記五つの年代区分との重なりがどのようになっているかを比較することは，外来語受容の変化を捉える上で意味があると考える。

第 1 章　外来語に関する記事の内容別分類と検討

1.1　解説その他の一般的な記事

朝日新聞で32件，日本経済新聞で51件，合計83件見つかり，全項目の中で最も件数が多かったものである。外来語や外来語問題についての解説を中心とした記事をこの範疇に入れているが，内容的には，さらに二通りに分類した。それは，文章中の外来語についての執筆者の意見に注目して，(1) 純粋に解説的なもの，(2) 解説中に執筆者の立場が表明されているもの，との二通りである。(2) のほうは，当然ながら，このあと検討する「是非論に関する記事」と内容的に重なるものであるが，ここではその中心が解説にあるものを対象にしている。

1.1.1　純粋に解説的なもの，および一般的内容のもの

解説中にはっきりした意見が表明されていない記事は，朝日新聞で24件，日本経済新聞で38件見つかった。内容的には，外来語やカタカナ語そのものに関する解説や，カタカナ文字の性質や効用について述べたもの，そして調査結果などの数量的報告が大部分を占めている。代表的なものを年代順に並べると，次の通りである。

◆ 大体，近代文明的のもの，電気，機械，高層建築，交通，経済，宇宙，原子力などの分野では，カタカナが幅をきかしている。デパー

トもそうだし化粧品など特にそうだ。精神文化的な分野ではひらがなの方がよろしい。俳句や短歌をカタカナでやってみてもピンとこない。（志垣芳星「消費の心理」，1969，日経）

◆ 明治22年刊の大槻文彦編『言海』では総語数に占める外来語の割合は1.4%だったが，昭和38年に出た『岩波国語辞典』では5.1%になっているそうだ（矢崎源九郎著『日本の外来語』）。茨城大学教授・石綿敏雄さんは，外来語の数は「現代の語彙の10%に達している」という（柴田武編『現代日本語』）。（「暮らしにとけこむ外来語——海外旅行と週刊誌が拍車」，1976，朝日）

◆ キャリアとは，生涯，経歴，成功，職業などを意味する英語。キャリアウーマンは，さしずめ「職業婦人」とでも訳されそうだが，ただ仕事をもっているだけではビジネスウーマンと呼んでもキャリアウーマンとは呼ばない。このほど，アメリカの女性大学教授の１人が書いた『キャリア・ウーマン』を翻訳した税所百合子さんは「永年かかって自他共に許す業績を積み上げた男性そこのけの有能な女性こそキャリアウーマン」と定義する。（「キャリア・ウーマン　いったいどんな人？」，1978，日経）

◆ カタカナ音訳語はこれまでの漢音や呉音にはなかった新しい音の結び付きを日本語に導入し，口頭での伝達を助けてくれた。（橋本万太郎「漢字文化の歴史と将来」，1986，朝日）

◆ 「靴下」と「ソックス」では，靴下派87%に対してソックス派13%で「靴下」の圧勝——。同じ意味でありながら，日本語と外来語が日ごろ入り交じって使われている言葉を対象に「好み」を聞いてみたらこんな結果になった。（「女性は外来語好き？」，1988，日経）

ここで取り上げた記事も含めて，それぞれの新聞では，全体に次のような特徴が観察される。まず，朝日新聞では，生活にかかわる身近な外来語に関する読者からの質問などに答える形のものが多く見られる。一方，日本経済新聞では，経済を中心とする情報関連のことばの説明や，外来語についてのさまざまな調査の報告，特に数量化された形での報告が目につく。その他，分類に関するもの，表記の問題を扱ったもの，外出語という呼び

名を与えて日本語の英語化現象を紹介したもの，いろいろな分野での国際化に伴う外来語の増加についてのもの，などが双方に共通する一般的な記事としてあげられる。

以上，外来語の解説や賛否の意見のからまない記事に限って整理した場合においても，その内容から判断されるのは，やはり，顕著な増加の傾向である。このあとの論述の中心である外来語の増加に対する日本人の反応は，すでに60年代以前から始まっており，それ以降の記事では，「氾濫」，「乱用」，「乱れ」，「変な」，「うんざり」など外来語に対するネガティブな反応を示すことばが，徐々に目立つようになってくる。解説的な記事においても，こうした流れと全く無関係な立場を保つのは困難であり，そこここに批判めいた口調が滑り込むのはやむを得ないようである。次にその種の記事を整理しよう。

1.1.2　解説中に執筆者の立場が表明されているもの

この項では，解説を中心としながらも，はっきりと筆者の意見が表されているものを紹介する。該当する記事は，朝日新聞では8件，日本経済新聞では13件見つかった。計21件の記事のうち，外来語容認派，積極的肯定派のそれも二，三見られたが，大部分は，外来語に対する不平不満，疑問，不安をからませた否定的なものである。この種の記事は，上に示した内容別三分類のうち，このあとの是非論に関する記事と重複する点を含むが，ここに取り上げるものはあくまでも解説中心のものに限っている。また，これらは，内容の性質上ほとんどの執筆者が国立国語研究所の職員や新聞の編集委員といった，言葉に関して専門的な知識を持つ人であるという特徴を持っている。ここでは，外来語に対する否定派の立場に立った代表的な解説記事（部分）を年代順に示してこの項全体をまとめよう。

- ◆ 結局，はなはだ常識的ではあるが，できるだけ外来語を使わないようにすべきであると私は思う。（岩淵悦太郎「外来語に対する私の心配」，1959，朝日）
- ◆ 近ごろ外来語が日常ふんだんに使われることも，日本が国際的に

なった表れかも知れないが，その半面，あちらかぶれの軽薄さが潜んでいることも見のがせない。まして本人は得意になって使っているのに，誤用，あるいは発音の間違いが，当人のほどを暴露しているとあっては，おかしさを通り越して日本人の恥。（平井信義「日本人は“外来語”がお好き」，1963，日経）

◆ これ以上外来語がふえると英語教育の邪魔になる面も出てきますね。発音だけでなく，本当の意味がわからなくなる。（上田満男「ウェスリー・リチャード氏「気になる和製外国語」」，1976，朝日）

◆ 軽々に外国語を自国語に採り入れる風潮は見ていて苦々しい。（諸井薫「外来語規制」，1994，日経）

これらの記事は，引用部分に見られるような考えに基づいて外来語を解説したものであるが，全体的に見ると，カタカナ外来語そのものに対してではなく外来語の受け入れ方や歴史など，外来語が我が国や諸外国で広まってゆく過程で及ぼした影響についての解説が多い。それらを具体的に述べるなら，流入の原因，分野別の流入の量的検討，受け入れ方とその姿勢（日本国内外の状況や相互の比較），今後の展望などについてのものが中心となっている。

ここで，いま引用した四つの意見について少し検討を加えよう。まず，岩淵の「できるだけ外来語を使わないようにしよう」という意見は，この記事が現れたのが1959年であることを合わせ考えると，すでにこの段階で外来語による日本語への影響が少しづつ心配の度を加え始めていたことを示している。ただこの段階で，現在ほどの変化を予想できている様子は見られず，その論調はまだ柔らかい。これに対して，岩淵からわずか四年後に出た平井の意見には，明白な揶揄が含まれている。また，近ごろしばしば目にも耳にもする「国際化」という言葉がすでに登場していることも注意を引く。ただ，ここで，過度の外来語使用を非難する目的で用いられている通俗的手法は，注意をして読みとる必要がある。たとえば，「誤用」および「発音の間違い」という表現は，必ずしも適切な批判とは言えない。外

来語の捉え方によっても違ってくるが，仮に外来語を日本語に入ってきた外国語起源のことばと考えるなら，外来語とはすでにして一定の日本語化の過程を経ていることになり，その段階で原語と比較して「意味や発音が違う」と非難するのはどうであろうか。外国語が，その意味や発音を変えないで日本語の中にとどまることは，もともとできぬ相談なのである。ましてそのことが「日本人の恥」となっては，どうしても行き過ぎの感を否定できない。ただ，平井の意見の主旨は十分理解できるし，その言わんとするところは，次の諸井において代弁されているといってよい。また，これも注意が必要な点であるが，リチャードに表明されている「英語教育への悪影響」というのも本末転倒の意見と言わなくてはならない。確かに，英語教師たちの間で，外来語，特に英語らしい顔をしたカタカナ語が誤った理解や記憶につながりやすいという意見が交わされることがある。しかし，実際には，日常化したカタカナ語は英単語の学習に利用できる，と考える教師のほうが多いようである。この点は，英語教育関係の雑誌にときどき寄せられるその種の提案から確認できる[3)]。もともと外来語は，日本の英語教育を手伝うために存在しているわけではないのだから，増えすぎて邪魔になるからという理由でそれを退けることはできない。確かに，日本語化された意味や発音を，再びもとの英語に戻すのは，それだけ見れば不都合かも知れない。しかし，学習者の興味を，その往復から発見できる二つの言語の間の意味的・構造的異同に引き寄せることは，英語教師の役目であり，かつ，言語教育の大切な一面である。

以上，引用した諸氏の意見の揚げ足をとるような論述になったけれど，それぞれに表明されていることは，この後とり上げる是非論と直接・間接に呼応している問題である。いずれにしても外来語に関する記事は，60年代以降，外来語の急激な増加に歩をあわせるかのようにその問題点を先鋭に

3)　たとえば，井出祥子（1973）「英語指導と外来語—意義素の比較を中心として」（『英語教育』，22巻6号）や長勝彦（1986）「外来語を授業の中に取り入れて」（『現代英語教育』23巻6号）などがあげられる。

してくる。そこで，次項では，外来語に対する賛成と反対の意見をよりはっきりした形で示して，それらの拠って立つ理由を検討する。

1.2　是非論に関する記事

ここで対象とする資料は，解説中心のものと異なり，外来語に対する是非の意見を正面から述べたものである。朝日新聞では11件，日本経済新聞では25件の合計36件の該当記事が見つかっている。これらの記事は，言語の専門家はもちろん，広く一般の人たちの意見をよく反映しており，外来語受容の実態，日本人の外来語に対する態度一般などを知る手がかりとして資料価値が高い。以下，これらを「否定派」と「肯定派」に大別して，代表的な意見を引用しながら全体を整理する。

1.2.1　外来語に対する否定的態度

朝日新聞で5件，日本経済新聞で19件が該当，うち6件についてその要点のみを引用する。

- ◆ 日本語で十分表現できるにもかかわらず，名詞から形容詞，果ては副詞，動詞に到るまで単に外国の発音のみをカタカナで書くのは一体どういう気なのだろうか。（中原弘義（学生）「外来語の取捨」，1951，朝日）
- ◆ むかしの軍隊では，ライスカレーのことを「辛味入り汁かけ飯」，コロッケのことを油揚げ肉まんじゅう」と呼んだそうである。りきみかえった国粋主義もどうかと思うが，日本語ではっきり言える言葉があるなら，日本語をつかったらよい。しいて外来語をひねる必要はない。（河野一之「外来語はんらん」，1961，日経）
- ◆ 無軌道きわまる横文字語の氾濫は，ひいては横文字外国語の正しい習得にとってさまたげともなる。なぜなら，そうした氾濫の底流にあるものは，ほかならぬ「言語蔑視」の意識であるからだ。（犬養道子「ミルクと牛乳」，1962，日経）
- ◆ 働く女性をOLといったり，家事のことをホームマネージメントと言ったりするのは，実体の改善をたな上げにした，悪質にみちた言いかえといわれても仕方あるまい。（山田雄一「タブー診断

OL といわねばならぬ」，1971，日経）

◆ 文句が出るかも知れないが，どうも私は今日の片仮名語商品激増の責任の半分は，日本の婦人大衆にあるように思う。化粧品，洋服類，台所用品，どれも片仮名にした方が売れるから，抜け目のない商人たちは争って片仮名を利用する。（城夏子「漢字恋しや」，1976，日経）

◆ 明治時代の外来語は取り入れ型だったが，今はのみ込まれ型。明治はぎりぎりの線で入れた。パンという言葉がなかったから外来語をつかったので，一般的にはできる限り日本語にした。ところが今は日本語でいえるものをわざわざ外来語でいう。このままほっておくと行くところまで行くでしょう。（黛哲郎「いま日本語は（2）外来語優遇で危機的状況に　鈴木孝夫氏」，1984，朝日）

ここに紹介した6点に共通する調子は，「日本語で十分に表現できるのにわざわざ外国語を使うという姿勢に対する非難」である。この点は，過度の外来語使用を不安視する諸議論に通底するもので，一見批判の角度は違っているように見える議論も，詰まるところこの問題を出発点にしている。確かに，必要以上に外国語に頼ろうとする姿勢は，ことばに対して意識的な人たちにとって最も不愉快な点である。これまでもその風潮を捉えては，「軽薄」という，反感を露呈した非難の言葉が繰り返し浴びせられてきた。近年の外来語の使用を苦々しい思いで眺めている人たちは，外来語について語る機会を与えられると，思わず感情的な表現に傾きやすい。上記引用文中においても，最後の引用を除いて，いずれもはっきり感情的な言葉を使用している。たとえば，「一体どういう気なのだろうか」，「外来語をひねる必要はない」，「無軌道きわまる」，「言語蔑視」，「悪質にみちた」，「抜け目のない商人」，「争って片仮名を利用する」などは，調子の強弱は別として，それぞれの筆者の皮肉や不満をよく伝えてくれる表現であろう。次にこれらの点を踏まえて，引用資料に現れた指摘を，その根拠の妥当性を確認しながら論述する。

まず，中原の意見は，今日見られる「必要以上の外国語使用」という，外

来語批判の中心的問題を先取りした形になっている。この問題が，1951年という早い段階ですでに一般の人たちの注意を引いているというのは，筆者の予想外のことであったが，その後60年代に入って急増するこの種の批判を見ると，カタカナ語の氾濫の芽はこの時点ですでに膨らみ始めていたと考えて間違いない。

ここで少し注意しておきたいのは，犬養の意見である。その主旨は，良く理解できるが，その表現はいささか先鋭に過ぎる感がある。「外国語習得の妨げになる」という意見は，1.1でとり上げたリチャードのものとは，その意味する方向が違っている。ここで犬養が言いたいことは，より精神的な問題であろう。解説的に述べるなら，すぐあとの「言語蔑視」という激しい言葉は，「日本語を，そして取り入れようとする外国語をもっと大切に扱おう」というふうに砕いて考えるとわかりやすい。その上で注意すべきは，かつてE.サピアが例えたように[4]，ことばは歩行と同じく自然にあたえられたものであるかのような錯覚を起こさせるところがあり，日常生活の中ではその使用にあたって殊更大切にしたり蔑んだりする意識の対象にはなりにくいのである。われわれは，話している最中には，それを守ろうとか，良くしようとか，いらなくなったから捨ててしまおうとか思っているわけではない。ある言葉がいつの間にかわれわれの日常を飾るようになったかと思うと，かつて同じ役回りをしていた別の言葉が，これまたいつの間にか失われているのである。つまり，われわれは，日常的言語活動の瞬間瞬間には，自分が用いている言葉を客体化することはないのである。だ

4) 参考までに*Language*（1921）冒頭の文章を示す。ただし，Sapirの本旨は，'Yet ...'以下の省略した個所に述べられている。ここでは，「ひとは，日常の言語生活では，決して言葉を吟味しながら使っているのではない」ということを確認すべく，冒頭の部分のみを紹介した。

'Speech is so familiar a feature of daily life that we rarely pause to define it. It seems as natural to man as walking, and only less so than breathing. Yet it needs but a moment's reflection to convince us that this naturalness of speech is but an illusory feeling. .....'

からこそ，過度の外来語使用という「無意識の産物」に対して，強烈なイデオロギー的性質をおびた「言語蔑視」という表現が投げつけられると，われわれはどこか落ちつきを失ってしまうのである。

次に山田のとり上げている，いわゆる婉曲語法（euphemism）の問題にふれてみよう。かつて「便所」のことを「WC」と呼んだ時代があり，そのとき，「ＷＣ」は 'water closet' のことだから「水洗便所」に相当する，水洗でもないのに「ＷＣ」というのはおかしい，などという意見が交わされたことがある。その後，便所のことを「ＷＣ」と呼ぶのは廃れてしまったが，これなども，山田の言う '実体の改善をたな上げにした，悪質にみちた言いかえ' になるのだろうか。同じ指示対象を前にして，何か新しい，よりよいイメージにつながる表現を探そうとするのは，人間の言語使用における一般的傾向である。容器としての言葉は，いわば，衣装のような面を持っているので，ときどき古い衣装を脱ぎ捨てようとするのはごく自然なことである。だから，視点を変えれば，山田がとり上げた例にしても，働く女性が OL と呼ばれてうきうきするならそれはそれで良いではないか，ホームマネージメントと言うことで面倒な家事が少しでも楽しくできるのなら結構なことではないか，という考えだって成り立つのである。また，「片仮名語商品激増の責任の半分は，日本の婦人大衆にある」という城の考えも，先入見に囚われており公平を欠いている。責任の半分は女性というのは，後の半分が男性といっているわけで，結局何も言っていないのに等しい。確かに，化粧品や服飾関係の言葉には，カタカナ語が多い。理由は，その方がよく売れるからで，商人がそれを利用するのは当然である。ましてそれを買う女性がカタカナ語の増加に手を貸している，というのはいかにも短絡的で，且つ的を射た説明ともいえない。カタカナ語の増加は，男性が中心的役割を担ってきた分野でも同様に観察できる現象なのである。例えば，かつての会社名横文字化の動きはその好例で，城に先だつ1950年代の終わりに既に新聞を賑わしている[5)]。この傾向は，その後も途絶えること

5)　関連する記事として「片カナの社名」（日経，1959. 10. 15）および「カナ文字 ↗

なく続き，その結果がもたらしている日本の街の風景は，われわれ自身がよく知っている。

最後の引用にある言語学者の鈴木孝夫の意見は，紙面の都合からか，或いは一般の読者を想定してからか，かなり端折った内容になっているが，明治の取り入れ型にたいして今日ののみ込まれ型という表現は，状況をうまくまとめていると言える。明治時代には当時の日本になかった概念や事物をできるだけ日本語に移し変えて取り入れたというのは，その通りである。その結果生み出された言葉は，今日では一般にそれが外来の概念だとは意識されないほどに日本語になりきっている。たとえば，「経済」，「愛」，「個人」など[6]がそうで，これらは「借用翻訳」と呼ばれている。ただ，苦労の結晶とも言うべきこれらの言葉も時代が進むにつれて徐々に作られなくなり，この厄介な作業も大正時代の始めにはすでに放棄された感がある[7]。その理由の一つは，輸入される概念や事物の多さであり，もう一つは，そのままカタカナ書きにして用いることにともなうモダンかつペダンティックな雰囲気のせいで，これらの理由は，そのまま現在の外来語の氾濫の理由としても通用する。ただ，大正期のカタカナ語嗜好と現在のそれは，単純には並べられない。前者において牽引力となったのは，主としてインテリ層に属する人たちであるのに対して，後者のそれは，若者を中心とした一般大衆だからである。そして，この牽引力の大衆化こそが，今日繰り返されてる外来語批判を構造的に支えているのである。すなわち，大正期の外来語は，一部インテリ層という少数者によって持ち込まれた言葉を多数者である大衆が認可するという形で日本語に取り入れられていたと考えられ

↘ 会社」（日経，1960.07.13）の二つが見つかっている。

6) この点については，柳父章（1987）『翻訳語成立事情』に詳しい。

7) この点は，現在調査中の文学作品におけるカタカナ語使用の実態からすでに確認できている。調査の経過については，拙論「外来語考序説」（1999）を参照されたい。また，山本いずみ（1995: 77）も「大正から昭和にかけて，カタカナで原語の音を写した音訳語（以下外来語と呼ぶ）の使用は急激に増加している」点にふれている。

るのに対して，今日のカタカナ語の増加は，一般大衆が直接その仕入れに加担していて，インテリ層はその勢力に屈してやむなく認可しなくてはならなくなっている，という構造上の逆転が認められるのである。だからこそ，今日の外来語批判に共通する鍵語は，「軽薄」，「恥」，「不安」，「乱用」，「氾濫」，「乱れ」，「カタカナ病」，「うんざり」などであり，その意味の銃口は，いずれもいわゆるインテリ層から一般大衆へと向けられたものである。このように考えると，鈴木にある「このままほおっておくと行くころまで行くでしょう」という言葉は，大衆の持つ圧倒的な力の前で無力感をにじませるインテリ者の嘆きのようにも聞こえるし，また，それはそのまま外来語使用における主導権の交替を象徴していると捉えることもできるのである。

1.2.2　外来語に対する肯定的態度

先に触れたように，多用される外来語を好意的に受けとめる意見は，比較的に少ない。朝日新聞で3件，日本経済新聞で3件，合計6件の該当記事を見出したのみである。ここでは，そのうちの4件の要点を引用する。

- ◆ 外来語はむしろ国語の混乱を救うものであると思う。世界の言葉がミックスしてどこの国でも通用する言葉の増えてゆくことを希望している。（「『外来語辞典』を作った荒川惣兵衛氏」，1967，朝日）
- ◆ 「日本語が乱れる」と嘆く声も多い。だが一方で日本語は，外来語を巧みにとりいれることで表現を豊かにしてきた。一概に外来語のはんらんを責めるわけにもいかないと思う。（「外来語辞典」，1977，朝日）
- ◆ 外来語がふえているというけれど，それは語彙の問題であって，いくらふえても，日本語の構造までは変わらない。文脈にかかわりないんだ。〈私は，行く，カルチャーセンターへ〉という言い方にはなりっこない。（阿部公房「いま日本語は（3）外来語増えても構造は不変」，1984，朝日）
- ◆ 日本人は，カタカナという表音文字で外来語を記号化を行って，科学の進歩にいちはやく対応してきた。その効用ははかりしれな

い。(多田富雄「カタカナの効用」，1995，日経)

この四点のうち，外来語擁護の理由として批判に耐えうるのは，阿部公房の意見だけである。確かに，外来語による日本語の変化は，基本的に語彙レベルの問題である。阿部が言うように，語順などの統語論上の変化が生じることは，まず考えにくい。言葉による伝達行為の成立は，メッセージの送り手と受け手の間に一定の共通理解があることが前提となる。もっと正確に述べるなら，送り手と受け手のそれぞれの立場で理解されたメッセージが両者の間で一致していると錯覚することが前提となる。ここでコミュニケーション論に深入りするつもりはないので，これ以上は述べない。そこで，いま指摘した前提条件を認めるとすると，外来語がいくら増えてもそれ自体は何ら心配する必要はないことになる。なぜなら，メッセージの送り手は相手がそれを受けとめてくれると思うから送るのであって，伝達を目的としながらわざわざ相手に通じない言葉を選んだりする人はいないからである。そうした行為を敢えてするというのは，主たる目的が伝達以外のところにある場合（e.g. わざと誤解を誘導しようとしているとか，それによって自分をよく見せようとしているとか）に限られる。

このように考えると，俗に言う「必要以上の」外来語使用などそれほど気にかけるべき問題ではないということになるが，ことはそれほど単純ではないかも知れない。確かに，外来語に対する一般の不安自体は看過しておいてもいずれどこかに吸収され，それと共に問題も解決されるのかも知れない。それよりも心配なのは，伝達行為そのものの変質である。それは，簡単に言うなら，レジスター（言語使用域）の混同あるいは無視による伝達の不成立である。通常どんな個人も，特定言語社会の中で複数のレジスターを持っており，日常的にそれらの間を行き来している。たとえば，医者は，患者に対して使う言葉と医者同士で使う言葉を区別するし，また，自分の家族との会話では別な言葉遣いをする，というふうにである。ところが，最近の日本人の言葉遣いをみていると，この黙約とも言うべき伝達行

為を成立させるための条件が簡単に破られているところがあるように思えてならない。政治家の発言や公報文書，あるいは新聞，テレビ，ラジオなどマスコミュニケーションの性質を持つメッセージから，花屋に並ぶ鉢花や台所用品の名前といった日常的・個別的なメッセージに到るまで，われわれは，いつの間にか，意味不透明なカタカナ語に取り囲まれて暮らしているのである。この状況は，たとえて言うなら，医者が患者に病状を説明するのに医学の専門用語を使っているようなものである。われわれは，この現象を，「コミュニケーションの隠語化」と呼ぶことにする。その意味するところは，メッセージの受け手を無視した伝達行為である。現在進行していると思われるこの「隠語化現象」の恐さは，メッセージの送り手自身がそれに気付いていないかも知れないという点である。結果として生まれる透明度の低い言葉の多用は，理解できない方に責任がある，と言わんばかりの傲慢さをどこかに含んでいるような気がするのは，そこに原因があるからかも知れない。そして，今述べた観察がもし正しければ，外来語が，伝達の不透明化，ひいては不成立に一役買っているのは明らかである。しかし，注意しなくてはならないことは，この問題の責任は，外来語そのものにあるのではなく，「伝達行為の隠語化」という日本語社会全体の変化にあるということである。この意味から，外来語に対する非難は，注意深く読み分けられなくてはならないであろう。外来語に向けられている当惑，不安，立腹などの矛先は，もっと深い，別な対象に向けられるべきかも知れないのである。

以上，この項では，外来語に対して肯定的な意見を紹介し，それを手がかりに外来語批判における新しい視点を提示した。ここで「コミュニケーションの隠語化」と名付けた現象は，表面的な外来語批判の蔭に隠れて見えにくくなっている言語現象に光をあてる意味がある。ただ，それについて論じることは本稿の目的ではないので，ここではこれ以上触れない。問題の性質上，別に稿を起こしたいと考えている。また，外来語に対して賛否の姿勢を留保しながら中立的な視点で意見を述べた記事が，朝日新聞で

3件，日本経済新聞で3件見つかっているが，その内容は割愛する。

1.3　公的機関の決定・報告等に関する記事

該当する記事は，朝日新聞で12件，日本経済新聞で18件，計30件見つかり，その大部分は国語審議会の答申に関係している。答申は，調査の対象となった期間中では1952年3月と1991年2月の二度出されていて，記事もその時期に集中して現れている。また，30件の記事のうち28件が1991年の答申に関連している点は，興味深い。なぜなら，外来語というある意味では周辺的とも言える問題にこれほどの注意・関心を払えるということは，それだけの経済的・精神的余裕が生まれたということであり，日本が，戦後40年余りを経て漸くこの段階までたどり着いたということでもあるからである。

ここでまず，52年答申の内容と91年答申の内容とでどのような違いがあるかを確認しておこう。要点だけを簡単にまとめると，それぞれ次のようになる。

52年答申：(1)　外来語をカナ書きで統一する
　　(2)　表記は，原音主義をとらず，日本語化した発音を写すのを基本とする

91年答申：(1)　表記は，原音と慣音[8]の両方を尊重し，全体として緩やかな指標を与える
　　(2)　学校教育への導入の指針を示す
　　(3)　外来語の氾濫を審議の対象にしている

どちらの答申も外来語の表記法についての方針を示していることは同じであるが，その問題とするところは異なっており，互いにそれぞれの時代の要求を反映している。52年答申当時は，それまでの表記法そのものに問題があったというよりも，たとえば，「コピー」や「コミュニケ」が人に

8)　外来語の慣用的カタカナ表記によって示される発音を指している。

よって「コッピー」であったり「コンミュニケ」と書かれたりする不統一のほうが，むしろ問題なのであった。だから，この答申で目標とされている「統一的な表記」というのは，91年答申で問題となった「原音と慣音のどちらに従うべきか」という意味での統一・不統一とは，その性質を異にしている。91年答申が原音主義を尊重するという姿勢をとらざるを得なかった背景には，70年代から80年代を通して，52年答申の頃とは比較にならないほど多くの外国語が日本語に入ってきたという事実がある。同時にわれわれ日本人が，英語を中心とした外国語にそのままの形で接する機会が，日常的に増えてきたことも指摘できる。それまでの「ビーナス」を「ヴィーナス」と表記してもよいとする原音の尊重は，現在の日本で，「コピー」と「コッピー」が共存する不統一とは別の不統一が起こっていることを意味している。そしてこの新しい不統一は，一種の伝達不成立（communication breakdown），本論で提案する「伝達行為の隠語化」とどこかでつながっている節がある。外国語の流入が必然的にもたらす不透明さは，われわれの生活を色彩豊かなヴェールで覆うと同時に，その実体を見えにくくもする。そして，この不透明さが伝達の不透明さにまで及んできたとき，つまり，伝達が極度に特定小集団化（＝隠語化）するとき，それは思いがけない社会問題につながる懸念がある。たまたま，本稿執筆中，日本経済新聞「春秋」欄[9] に，いま指摘した点に通ずると思われる意見があらわれた。少し長いが，全文を引用する。

> 同じカタカナ言葉でも，すんなり入ってくるのと，どうにもこなれが悪いのがある。脳死判定や臓器移植にからんで，このところずいぶん聞かされたインフォームド・コンセント（十分な説明の上の同意），クオリティー・オブ・ライフ（生活の質）などは，未消化どころかかみ砕かれてもいないままメディアを飛び交っている。
> ▼医療スタッフは何事につけ患者や家族にきちんと説明して納得を得

9)　1999年3月6日付け日本経済新聞（朝刊）1面「春秋」欄

る。ひたすら延命をはかるのではなく，患者の日々の暮らしの充実を考えて，治療の方法や日程を選択する。これが二つの言葉の意味だ。特に複雑な内容ではない。すわりが悪い現在のかっこ書きの訳語とは別に，簡にして要を得た適当な日本語がなぜできないのだろうか。

▼言葉は現実社会の鏡でもある。二つの言葉は患者の人格と選択を尊重しようという医療の新しい流れを反映して米国で生まれた。米国では，医療機関の説明が威圧的だったり，誘導的だったりしないように，細かな規定まで設けているという。新しい言葉が生まれるまでには，たくさんの医療裁判も含めて医療改革の長い歴史があるようだ。

▼その流れが，日本の医療現場にはまだ十分に浸透していないらしい。患者は医師へ全面的に依存し，人生の選択までゆだねてしまうことも多い。医師もまるで全能の指揮官のごとく振る舞うことに疑問を持たない。こんな図式の中からは，名訳やどんぴしゃりの新語は生まれそうもない。

この文章は，「インフォームド・コンセント」と「クオリティ・オブ・ライフ」をブラック・ユーモアとして使いながら，言葉と実生活の関係がいつの間にか遊離している現代社会に対して不満を訴えている。言葉と実生活の遊離とは，精神と物質の関係の不透明化にも置き換えられるもので，この文章は，そうした事態への警鐘ともなっている。外来語をきっかけとする言葉の意味の不透明化は，すでに現実に起こっている問題であり，その不安や不誠実に対する苛立ちは手っ取り早い攻撃対象としての外来語そのものに向けられる。ただ，注意しなくてはならないのは，ことばの不透明化という問題は，その責任を外来語に押しつけ，外来語を制限しさえすれば解決するものではないという点である。この問題の根本原因は，相手との距離を適切に計れない伝達行為や意味を置き去りにした言葉遣いといったわれわれ自身の言語行為に潜んでいる。それは，とりもなおさず，そうした行為を許している社会全体の意識の問題であり，魔女裁判的な解決法では対応できない問題なのである。この高度に社会学的な問題は，「隠語の社会学」あるいは「コミュニケーションの隠語化」という主題のもとで，改

めてとり上げられるべき性質のものと考えている。

以上，国語審議会の二通りの答申を材料に，過度の外来語使用という現代日本的現象を簡単に説明した。先に述べたとおり，この項に関係する新聞資料は，そのほとんど全てが国語審議会の答申にからむものである。整理してみると，二つの答申の背後に見えかくれする時代の特徴は，他愛なくもあり，また何か重大な問題をはらんでいるようでもある。

第 2 章　外来語に関する記事の年代別分類と検討

この項では，収集した資料を通時的に捉え直すことによって，時代的特徴と外来語受容態度の変化の関係を整理・検討する。ここで対象とした資料は，末尾に参考資料として付してある。また，年代区分にあたっては，米川（1996）に見られる区分のうち，本研究に直接かかわる戦後の時代区分をその区分理由と共に使用している。米川は戦後の時代区分の基準として，外来語の流入その他の問題が日本の経済の流れと密接にかかわっているとして，それぞれの区分に当時の経済事情を反映させている。その五区分は，すでに「はじめに」の項において示したがここに再掲する。

1. 1945年から1951年まで
2. 1952年から1959年まで
3. 1960年から1972年まで
4. 1973年から1982年まで
5. 1983年から現在まで

以下，この区分に沿って資料を通覧し，それぞれの時代と外来語との関連を資料を通して検討する。

2.1　1945年から1951年まで：「この時期だけは経済以上にアメリカの進駐軍に占領されていたことの方が外来語の流入に大きな影響を与えた」（米川，1996: 90）

この時期について入手できた資料は，朝日新聞の CD-ROM 検索による一

件のみで，日本経済新聞については縮刷版が出されていなかったため入手できなかった。資料があまりにも少ないため一般的傾向を導くことはできないので，記事の要点を示すにとどめておく。その一件とは，朝日新聞の1951年9月17日付朝刊3面に掲載された「外来語の取捨」と題された記事である。その中で筆者の中原は，日本語で言えることをカタカナ外来語で言い換えることなどを中心に外来語の使用について批判し，外来語使用の限界について方針を立てるべきだと提言している。終戦からわずかに6年後のことであるが，既に現在と同じ状況が出現していることを示していて興味を引く。もちろん想像の域を出ないことであるが，当時の日本人の外来語に対する姿勢は現在の姿勢とは異なっていて，それは鈴木の言う「取り入れ型」と「のみ込まれ型」の違いにおおよそ相当するものではないだろうか。筆者の観察によると，たとえば，1947年に出版された石坂洋次郎の『青い山脈』のなかでの若者たちのカタカナ語の使い方は，現在のカタカナ語使用に比べてはるかに透明度が高いのである。限られた資料での一般化は避けたいので，この時期に関しては以上の紹介にとどめておく。

2.2　1952年から1959年まで：「この時期はテレビを通じて外来語が入り普及した。中でも放送用語の外来語はテレビ放送が進んでいるアメリカを参考にしたのでこの期に英語から入ったものである」「経済的余裕が出るにつれてスポーツに時間をさき，スポーツ外来語も目立つようになった」（米川，1996:91）

この期間に相当する記事は，朝日新聞で4件，日本経済新聞で2件の計6件である。日本経済新聞の縮刷版は1959年4月より出版され始めたので，ここでも資料は限られる。ただ，該当記事の中で解説の対象となっているカタカナ外来語の例をみると，テレビでの放送用語が多いこと，外来語の多い分野としてスポーツ，服飾，演芸が挙げられていることなどから，米川が区分理由として示した傾向が，明確とは言えないまでも一部確認できるのではないかと思う。

2.3　1960年から1972年まで：「大量消費社会が到来した。大量生産によって生地や既製服が易く作られるようになり洋服化が進んだ。服飾雑誌は好んで外来語を使用した」「この時期，経済学をアメリカから導入したため経済用語，多くは企業組織や経済活動に関する外来語が入ってきた」（米川，1996: 91）

このころから外来語関連の記事が増え，次期以降急速にその数を増すことになる。この期間における該当記事は，朝日新聞で5件，日本経済新聞で27件の計32件見つかっている。とくに日本経済新聞では，経済界においてカタカナ語が増加していることを直接とり上げたものが多数見られ，米川の示した区分理由を裏づけている。また，この期間で目立つのは，外来語の是非を論じたものが増えていることである。収集した記事全体の半数近くが，これに該当している。これ以降，外来語の是非に関する議論は一定数を保ちながら紙面に登場するようになるが，それはそのまま，外来語への問題意識の高まりを示していると言える。また時代は，1964年東京オリンピック開催，海外旅行者20万人突破などの出来事により華やかに彩られていたこともつけ加えておこう。

この時期の是非論に関する記事の内訳を見ると，14件のうち9件が否定派，2件が肯定派，残る3件が中立派のものであった。否定派の意見は，「日本語を大切にしていないことの現れだ」，「もっと日本語の素晴らしさを理解すべきだ」，「日本語を守り育てていかなければならない」という感情論が中心であり，その口調には，後に現れてくる「不安」や「危機感」は，まだ少ない。

2.4　1973年から1982年まで：「1973年のオイルショックにより日本経済は産業構造の転換をはかり，サービス産業の技術革新が進んだ。重化学工業からマイクロエレクトロニクス産業が主役におどり出た。この波はオフィスや家庭に押し寄せ，情報化社会が到来した。コンピュータ用語の外来語が流入してきた」（米川，

1996: 91)

この期間に相当する記事は，朝日新聞で22件，日本経済新聞で26件，計48件見つかっている。前の時期に比べて数の違いが目立つのは，外来語についての解説記事である。その内容も，論者の立場がはっきりしている是非論のようなものとは異なり，外来語の語義，語源などの説明，外来語使用の効用，統計的数字の紹介，などを軸にした解説が中心になっている。その一つを部分的に引用して，内容を紹介しよう。

◆ もっともふえたのは服飾用語，ついで料理用語。(中略) 政治，社会，法律，あるいは哲学など，早くからわが国に紹介されている分野には，すでに訳語が定着していて，外来語はかえって少ないそうだ。(「暮らしにとけこむ外来語　海外旅行と週刊誌が拍車」，1976，朝日)

この記事から判断する限り，70年代から80年代の日本は，その経済的発展のおかげで国民全体の生活水準があがり，それに呼応して流入する外国語も生活の余裕を感じさせる分野にまで広がってきている。いわゆる表面的意味での「文化」が，新しく展開されつつあったのである。同時に，増加する一方の外来語に対する新しい心配も生まれつつあり，それは次の引用にも読みとれる。

◆ 外来語のはんらんは日本語の語彙と造語力を貧弱にし，へんな記号は日本語の文脈をこわしてしまう。大問題だ。(「日本語の文脈をこわす記号過多」，1977，日経)

◆ 外国語が入ってくると，それがとても新鮮な気がして，すぐ外来語としてとり上げて“ナウい”とかなんとか，いろいろ言葉をつくっちゃうんです。それがただ言語のファッションとして終わるんならいいのですが，本来ある日本語が浸食されていくとすれば，重大な問題だと思っています。(「日本語教育　日本人にも必要では」，1982，日経)

このように，外来語批判の調子にも，以前のような日本語の側からの攻撃的意見が少なくなり，日本語の足元が怪しくなっていると考える向きからは，むしろ守勢にまわったと思われるような意見が提出されるようになっている。この二例の調子は，明らかに受け身的であり，この間の変化をよく表している。ただ，「日本語の語彙と造語力を貧弱にし，へんな記号は日本語の文脈をこわしてしまう」，「言語のファッションとして終わる」，「本来ある日本語が浸食されていく」などの表現は，修辞的に過ぎ，その厳密な意味からは指示内容に疑問が残る点をつけ加えておく。

この期間に現れたその他の記事にも，興味深い内容のものが幾つか認められる。その内容には触れないが，この時代の外来語の動向を推理する手助けとして，主要な記事の表題のみを一括して次に示す。

○　宮島達夫「部分輸入の外来語」（朝日，1976. 12. 23）
○　「興味深い日本語の未来」（日経，1980. 01. 17）
○　鈴木治雄「和製英語」（日経，1980. 04. 28）
○　「カタカナの映画題名」（日経，1980. 06. 21）
○　「カタカナタイトル」（日経，1981. 04. 29）
○　「カタカナ職業好みのタイプよ　女性の進出増える」（日経，1981. 12. 09）
○　「カタカナ題名の映画」（日経，1982. 02. 20）
○　「うんざりカタカナ料理　メニューも味も単調」（日経，1982. 09. 16）
○　「洋画の日本題は正式統一表記に」（日経，1983. 02. 19*）

これらのうち，筆者が特に注目するのは，いわゆる洋画の題名のカタカナ表記である。この期間だけでも，3件，最後の例を加えると4件となり，しかもこれらは80年代初頭に集中していることがわかる[10)]。それ以前の洋画題名は，出来るかぎり日本語に翻訳して紹介されていたのであるが，何ら

10)　このことを裏づける資料としては，たとえば，沼田昌子（1990）による調査報告「カタカナ英語 '90 — カタカナ英語の歌と映画の題名」がある。

かの理由ときっかけで徐々に片仮名書きのまま現れるようになってきた。それは，1990年代に入って急に速度を増しており，たとえば，1999年1月封切りのアメリカ映画'You've Got M@il'はそのままカタカナ書きされ「ユー・ガット・メール」として広告されている。これなどは極端な例かというと決してそうではなく，これは，最近の洋画題名に一般的な傾向である。外来語擁護派といえども首を傾げたくなる状況が生まれつつあると言えるのではないか。この不透明化現象も検討する必要があると考え，現在，戦後の洋画題名を調査中である。そのおおよその流れがつかめれば，特に90年代に入って「言語帝国主義」あるいは「文化帝国主義」の呼び名で批判の対象となっている「精神の植民地化」[11] の問題と結び付けて考察できるかも知れない。

2.5　1983年から現在まで：「キャプテンシステムや文字多重放送・衛星放送・ビデオディスクなどのニューメディアの出現によって高度情報化社会に入った。また87年から91年までのバブル景気，円高による内需拡大で消費も拡大し，一般家庭の中に高価な情報機器が入ってきた」「コンピュータ用語，ニューメディア用語が一般化した」（米川，1996: 91）

この期間は，これまで以上に外来語関連の記事が増え，朝日新聞で31件，日本経済新聞で93件，計124件見つかっている。その内訳を見ると，1992年2月に出された「外来語の表記」という国語審議会の答申をめぐってのものが多い。この頃になると，日本人が日々接する情報も以前に比べてはるかに国際的になっており，それにつれて外来語も未加工のままわれわれの生活の中に入ってくるようになった。また，それと並行して，単に未加工とか未消化といった言葉では説明できない新しい流れも加わってきた。そ

11)　この言葉が新聞記事に現れた例としては，「言葉の植民地化防ごう」（日本経済新聞夕刊，1995. 11. 7）がある。また，ケニアの作家，グギ・ワ・ジオンゴの評論集，『精神の非植民地化』（1987）は，直接この問題を扱ったものである。

れは，次の記事に見られるような傾向である。

◆ 恐ろしい勢いで日本語が英語に置き換えられている。力はパワー，技能はスキル，介護はケア，売り出しはセール。（中略）いわゆる外来語とは違う。日本語でいえるものをわざわざ英語（もどき）にしている。（「春秋」，1995，日経）

ここで指摘された傾向は以前から存在していて，たとえば，「台所」を「キッチン」，「胡椒」を「ペッパー」，「料理」を「クッキング」などと言い換えるのもこの類である。これは，日本語で用が足りるところをわざわざカタカナ語を用いているわけで，舶来物の名前として入ってきた「リボン」や「ハンカチ」がそのまま日本語に居着いたのとも事情が違う。この現象は，戦後の日本人の外国語学習，特に英語学習に支えられている面があることは間違いない。すなわち，その善悪は別として，安心して日本語を「英語化」する心理的準備が，日本人全体に出来てきたのである。このように考えると，強引なカタカナ語化の例である「ユー・ガット・メール」にしても，単にこの心理的準備の程度判断を誤ったのだとも言えるし，また，この強引さこそが日本語の「英語化運動」のリーダーだとも言えるのである。

このように，既にある日本語ですら英語その他の外国語で置き換えられるのだから，耳新しい外国語がそのまま外来語のような顔をして日本語の中に居座っても不思議はない。こうして，われわれの生活は，アクセス，インフラ，コンセンサス，アセスメント，トラウマ，クアハウス，……と目まぐるしいばかりのカタカナ語で飾られるようになった。そして，これらの言葉にお墨付きを与えることによってこの傾向を助長したのが行政一般だというのは，何とも皮肉なことである。行政の分野でのカタカナ語使用に疑問を投げかける記事が目につくようになってから，既に20年近くが経過している。二例ほど引用して，その意見を紹介する。

◆ 「一見，新しさを装いながらも意味があいまいな行政用語は，国民

の理解を拒絶し，行政の権威主義を温存させる」という最上氏の指摘には，耳を傾けざるをえないだろう。(「氾濫する“行政外来語”，1984，日経)

◆ なぜ，行政にカタカナ語がはんらんするのか。英語をちりばめると，目新しく映る錯覚がある。情報・通信・福祉の分野では適当な訳語がなく，安易に使う例が多い。さらには，(中略) 官僚独特の言語感覚があるのかもしれない。それにしても，いささか度が過ぎる，と最近，「日本語復権論」が台頭し始めた。(「お役所流カタカナ語はんらんかなわん」，1988，朝日)

いわゆるお役所言葉に加えて「お役所流カタカナ語」と呼ばれるものがいつの頃から増え始めたのかは不明だが，江國 (1989: 192) において既に「……ちんぷんかんぷんのことばが官公庁の計画書に氾濫してやまないものだから，とうとう『カタカナ語100選』という五十ページにものぼるアンチョコが，当の役人相手に「ひそかに出回っている」[12] という話も新聞 (朝日，昭和63年5月13日付) で読んだ」と述べられていることから，行政レベルでのカタカナ書き外来語の多用は，少なくとも1980年代後半には世間の注意を引くようになっていたと考えて間違いない。それにしても，簡便な日本語がないわけではないのに，敢えて解説書まで用意して不自由な言葉を使い続けることの意味はどこにあるのだろう。不可解とも滑稽とも愚かとも非難されうるこの傾向は相変わらず続いており，現在では行政以外

12) この種の本は，「ひそかに」どころか既にこの頃には公然と出回っていた。例えば，公人の友社発行の『他人に聞けない地方自治カタカナ用語集』(1983) がある。この本の編集方針は，カタカナ語に対する当時の日本人の意識を反映していて興味深い。その方針とは，次の三点にまとめられている。①読者である地方公務員にとって一つ一つのカタカナ用語がどういう意味があるのか，という視点で解説する，②とりあつかう用語は，総務，企画，公報の職員から，厚生，福祉，環境，土木，建築，教育の職員まで — つまり，現代の地方公務員であれば，必ずお目にかかる，一度は耳にする用語を取捨選択する，③“聞くは一時の恥”とはいえ，基本的な用語や，同じことを何回も聞くことは気がひける。そのような“これだけは知っておきたい”という常識的・基本的な重要用語を選び出す。

の分野にまで及んでいて到るところでその喜劇性の度を増している。筆者の簡単な調査では，たとえば家電製品，インテリア商品，照明器具などの業者用大型カタログの多くは，その中で用いられているカタカナ語の意味説明が巻末に一覧させてある。つまり，このようなカタログでは，販売員にもわかりにくい言葉がリストになるほど多用されているということである。一例をあげれば，照明器具カタログにある「プルレス」，これは「天井取り付け型の照明器具から通常ぶら下がっている引き紐がない」ことを意味している。英語の知識の無い人がこの語を説明なしに理解するのはまず難しいし，また，英語の知識のある人ならその造語法に顔をしかめるかも知れない。いずれにしろ，われわれがこの語を呑み込むためにとりうる方法は，不透明なままでのコード化，分かりやすく言えば「丸暗記による音と意味の接合」であり，未消化であろうとなかろうとそれ以外に選ぶところはない。こうして，「紐なし」といえば誰にでも理解できるところを「プルレス」と気取ったために生じる不便は，そのメッセージの発信の側にも受信の側にも一種滑稽な負担を強いている。これまでに見てきた過度の外来語使用に対する不安や苛立ちは，つまるところ，この20年程の間に増え続けてきたこの種の言葉に対する反撥なのであろう。

お　わ　り　に

この調査では，1951年から現在までの約50年間を対象期間として朝日新聞と日本経済新聞に見られる外来語関連記事を整理し，内容別と年代別の二種類の分類に沿ってそれぞれの特徴をまとめた。記事に現れたさまざまな外来語批判には，時代を超えた主張もあれば，それぞれの時代の特徴をはっきりと映し出したものもある。そうした中で全体として言えることは，60年代あたりまでの批判がまだ日本語優位の立場からの威勢の良いものが多かったのに対して，その後は急速にその地位が逆転し，増え続ける外来語・カタカナ語を不安視する調子の意見が多くなったということである。また，本論で何度か用いた「コミュニケーションの隠語化」，別な言い方をす

るなら「言葉の矮小化」現象は，もしその観察が正しいならば，この調査を通して確認できたことの中で最も興味深い問題である。この問題は，新聞資料だけでは説得力のある証拠となりにくいので，今後，複数の角度から外来語使用実態調査を実施し，その結果を踏まえて論証しようと考えている。

なお，われわれが「隠語化」と名付けた問題に関連して，言語政策上特に注意しておかなければならない点がある。それは，外来語による混乱の責任を外来語そのものに押しつけて，問題の解決に外来語規制をもってあたろうとする考え方である。こうした力まかせの解決法は，結局のところ問題を見えにくくするだけである。繰り返すようだが，新着外来語，新造カタカナ語のわかりにくさは，その語自身に責任があるのではない。先に例に引いた「プルレス」にしても，見方によってはなかなかうまい造語と言うこともできる。問題は，意味の見えにくいこれらの言葉は，「丸暗記」という効率の悪い方法によってしか処理できないという点にある。「丸暗記」による言語学習の最大の弱点は，ことばの生命とも言える意味のネットワークを作りにくいということ，そのため他の言葉との連想関係が生まれにくいということである。結果的に，これら透明度の低い言葉が増えれば増えるほど，それによって構成されるメッセージもつながりの悪い不透明なものになっていく。そうした言葉を用いながらなお伝達行為を成立させるためには，メッセージの送り手と受け手に一定の制限を加えることが必要になる。たとえば，専門用語を用いた医者同士の会話，のようにである。これは，一種の隠語の世界であり，そこでは「仲間うちでの使用」という隠語の成立要件が守られなければならない。しかし，現在批判の的になっている外来語は，隠語的な性格を帯びているにもかかわらずその使用条件が守られていない節がある。新着[13] の外国語は，まず，スポーツ，映

13) ここでいう「新着」とは，外から流入する「特殊な」外国語に限らない。この語は，たとえば，前出の「力」に代わる「パワー」のような「日本語内部造反型」とも言えるような言葉も含意している。

画，音楽，経済，工学，漁業，……などの分野ごとに取り入れられた後，それぞれの分野の専門家たちによる一定の消化活動を経て「外来語」に加工される。つまり，この手順は，そのままでは意味の不透明な「外国語」を日本語として意味を与えられた「外来語」に変換するために必要な作業過程なのである。ところがその数が増えると，「外国語」は，一般化，すなわち意味の透明化のための十分な時間が与えられないまま世間に送り出されてしまう。この傾向は，専門家と素人の境界が曖昧になりつつある現代社会では，ますます加速する可能性がある。こうして，現代の日本では，「外国語」と「外来語」の中間に位置している言葉，すなわち，まだ十分に外来語化していない意味の不透明な言葉が増えている。鈴木の言う「のみ込まれ型」は，この状況を指しているものと考えてよいだろう。この種の言葉が増えるということは，とりもなおさず，われわれ日本人がそれを好んで用いているということを意味している。その結果，これらの語を用いてメッセージを組み立てることはできても，そのメッセージは，透明化の不十分な「半」外来語を含んでいるため，部分的に隠語化してしまうのである。この隠語化したメッセージが，隠語の条件である「仲間うちでの使用」という制約を無視して現れるところに現在の外来語批判を生む根があると言える。

以上，「コミュニケーションの隠語化」を中心概念としてこの項をまとめた。ただ，この概念は，まだ仮説の域を出てはいない。それは，興味深い仮説であると同時に，さらに丁寧な論証を必要とする。繰り返すが，「日本語の乱れ」の責任は，「外来語の氾濫」そのものにあるのではない。より大切な問題は，隠語化を通してわれわれの言語生活，ひいては日常生活全般がいつの間にか「矮小化」されていくというわれわれ自身の言語行動の中に潜んでいる。カタカナ語多用というわれわれの行動は，手元を公開して私物化しないという開放的な精神とは逆のようである。なぜなら，カタカナ語多用は，それによって伝達が不自由になるからこそ問題視されるわけで，相手にわかりにくい言葉を敢えて使う自己中心性と曖昧性を喜ぶ精神

は，開放的精神とは縁遠い。かりに日本人の閉鎖的な精神構造[14] がこの現象の下支えになっているとすれば，外来語の問題，さらには日本語全体の乱れの問題は，いままで以上にに大胆な角度から分析できるはずである。

(1999. 3. 14)

参 考 文 献

赤祖父哲二 (1996). 「内なる多文化」，日本記号学会（編）『多文化主義の記号論』，東海大学出版会，19–29.

石野博史 (1983). 『現代外来語考』，大修館書店.

石綿敏雄 (1983). 『外来語と英語の谷間』，秋山書店.

江國滋 (1989). 『日本語八つ当り』，新潮社.

公人の友社（編）(1986). 『他人に聞けない地方自治カタカナ用語集』，公人の友社.

高名凱，他 (1988). 『現代中国語における外来語研究』，関西大学出版部.

沼田昌子 (1990). 「カタカナ英語 '90 —カタカナ英語の歌と映画の題名」，『女子栄養大学紀要』，21巻，265–272.

Sapir, E. (1921). *Language*, Harcourt, Brace & World, Inc. New York.

山本いずみ (1995). 「訳語受容の変遷—新聞に使用された外来語」，『名古屋工業大学紀要』，47巻，77–84.

山田雄一郎 (1996). 「日本の食品広告：(2) アサヒスーパードライ」，『広島修大論集』，37巻1号 (2)（人文編），281–312.

山田雄一郎(1999). 「外来語考序説」，『新英語教育講義』，広島修道大学総合研究所，1–28.

米川明彦 (1996). 「外国文化の移入と外来語」，『国文学　解釈と教材の研究』，41巻，87–91.

14) この問題は，拙論「日本の食品広告 (2)：アサヒ・スーパードライ」において論じた。ここで「閉鎖的」と断定することの妥当性を説明する余裕はないので，詳しくは拙論を参照されたい。

使用新聞資料一覧（年代順）

外来語の取捨（中原弘義）	朝日（朝刊 3 面）	51. 09. 17
外来語のカナ書き統一	朝日（朝刊 7 面）	52. 12. 19
大衆と外来語（岩淵悦太郎）	朝日（朝刊 5 面）	54. 02. 25
法令用語を改善　国語審議会で可決　外来語書方も	朝日（朝刊 6 面）	54. 03. 16
外来語に対する私の心配（岩淵悦太郎）	朝日（朝刊 6 面）	59. 03. 24
片カナの会社	日経（夕刊 4 面）	59. 10. 15
カナ文字会社	日経（夕刊 6 面）	60. 10. 15
またまた新語	日経（夕刊 6 面）	61. 06. 10
外来語のはんらん（河野一之）	日経（夕刊 1 面）	61. 08. 03
「外来語」NHKテレビ	朝日（朝刊 8 面）	62. 01. 25
ミルクと牛乳（犬養道子）	日経（夕刊 1 面）	62. 06. 09
日本人は“外来語”がお好き　国語の“純潔”を無視（平井信義）	日経（夕刊 4 面）	63. 05. 27
外国語　水銀灯	日経（朝刊 6 面）	63. 07. 20
カタカナことば	日経（夕刊 6 面）	63. 08. 21
カナ文字はんらん	日経（夕刊 6 面）	63. 08. 23
言葉の乱れ（亀井勝一郎）	日経（夕刊 1 面）	63. 10. 10
国語問題以前（中村光夫）	日経（朝刊16面）	63. 11. 16
外来語の使用	朝日（朝刊11面）	64. 04. 13
ことばの乱れと放送（熊谷幸博）	日経（朝刊16面）	65. 01. 22
ことばの変遷（嘉門安雄）	日経（朝刊14面）	65. 06. 10
日蘭両語の交わり（フォス・フリッツ）	日経（朝刊16面）	65. 06. 12
ことばの乱用	日経（朝刊 6 面）	65. 06. 13
続々・日本人ほど（千宗室）	日経（朝刊16面）	65. 07. 02
韓国に生きている日本語（塚本政雄）	日経（朝刊16面）	66. 01. 14
日本語の断層（輝峻康隆）	日経（朝刊16面）	67. 05. 14
「外来語辞典」を作った荒川惣兵衛氏	朝日（朝刊19面）	67. 10. 27
カタカナ病ニッポン　無意味な新語乱造	日経（夕刊 8 面）	68. 07. 12
カタカナブーム	日経（夕刊 5 面）	69. 03. 31
カタカナ　消費の心理（志垣芳星）	日経（夕刊 7 面）	69. 10. 09
ジャパニーズ・イングリッシュ	日経（夕刊 4 面）	70. 07. 24
新語時代　売り手買い手（町田一郎）	日経（夕刊 8 面）	70. 10. 17
コンピューター時代と日本語（坂井俊之）	日経（朝刊21面）	71. 02. 23

タブー診断　OLと言わねばならぬ（山田雄一）	日経（夕刊9面）	71.03.18
国語の純潔を守れ　フランスが宣言　外来語は全部追放	朝日（朝刊6面）	72.02.04
外来語の書き方　お答えします（登内正）	朝日（朝刊30面）	72.12.10
外来語（加藤秀俊）	日経（夕刊1面）	72.12.12
まず，正確な日本語を　外来語も力をもてば定着	朝日（朝刊5面）	73.01.28
オランダ語文化	日経（朝刊24面）	74.07.04
言葉の骨とう趣味（吉田夏彦）	日経（夕刊7面）	74.08.19
新語の社会学	日経（朝刊20面）	74.12.23
洋服の語源ナゾをはぐ（中込省三）	日経（朝刊24面）	75.08.21
自作自演のコミックショー“詩の女優”波瀬満子“外来語大演説”など	朝日（夕刊7面）	75.12.09
ドイツ語の伝来	日経（朝刊24面）	75.12.15
漢字恋しや（城夏子）	日経（夕刊7面）	76.05.24
（解説）韓国の国語浄化運動　生活に根張る外来語（小栗特派員）	朝日（朝刊4面）	76.05.28
「外来語大演説」も　波瀬満子が記念講演	朝日（夕刊7面）	76.11.02
ウェスリー・リチャード氏「気になる和製外国語」（上田満男）	朝日（朝刊7面）	76.12.06
暮らしにとけ込む外来語　海外旅行と週刊誌が拍車	朝日（朝刊13面）	76.12.13
部分輸入の外来語（宮島達夫）	朝日（夕刊5面）	76.12.23
国語問題　論議呼ぶ，新漢字表（林巨樹）	日経（朝刊14面）	77.07.19
日本の文脈をこわす記号過多	日経（朝刊23面）	77.08.02
外来語辞典　今日の問題	朝日（夕刊1面）	77.08.13
「当世処世気質」と「言海」の外来語（辻村敏樹）	朝日（夕刊7面）	77.10.07
(97) 外来語　中国を知る	朝日（朝刊7面）	77.10.19
コトバの整理学　外来語 (1) スキンシップは英語か	朝日（夕刊5面）	78.04.10
コトバの整理学　外来語 (2) アントニーは消えたか	朝日（夕刊5面）	78.04.11
コトバの整理学　外来語 (3) カラフルの意味は何か	朝日（夕刊7面）	78.04.13
コトバの整理学　外来語 (4) 教室は取り去るものか	朝日（夕刊7面）	78.04.14
外来語の使用基準は	朝日（朝刊5面）	78.07.23
わからぬ“カタカナ語”	朝日（朝刊14面）	78.09.28
キャリア・ウーマン　いったいどんな人？	日経（夕刊9面）	78.09.29
外国文化摂取の現場報告「翻訳文化を考える」の分析	日経（朝刊26面）	78.11.14
日本語の変化　外来語の導入には短い訳語で（比嘉正範）	朝日（夕刊5面）	78.12.09

外来語カナ表記の基準	朝日（朝刊5面）	79.04.01
外国固有名詞の表記	日経（朝刊24面）	79.11.07
興味深い日本語の未来	日経（朝刊24面）	80.01.17
カタカナことば—日本に帰化した外国語	日経（夕刊7面）	80.02.01
和製英語（鈴木治雄）	日経（夕刊1面）	80.04.28
カタカナの映画題名	日経（朝刊24面）	80.06.21
翻訳語の変化	日経（朝刊24面）	81.01.24
カタカナタイトル	日経（朝刊24面）	81.04.29
生活の中の外来語　知ってますか	朝日（朝刊14面）	81.09.04
カタカナ職業好みのタイプよ　女性の進出増える	日経（夕刊3面）	81.12.09
カタカナ題名の映画	日経（朝刊24面）	82.02.20
日本語の変化	日経（朝刊24面）	82.02.24
藤村昌男「おとしよりのための外来語4000」	朝日（朝刊12面）	82.05.07
飛田良文「翻訳語成立事情」斬新な視点のことば考察	日経（朝刊12面）	82.05.09
日本語教育　日本人にも必要では（石橋幹一郎）	日経（朝刊7面）	82.08.22
ことばのゼミナール「外来語の乱用」	朝日（朝刊22面）	82.09.02
日本社会の七不思議　なぜカタカナ語が流行るか，など	朝日（夕刊5面）	82.09.14
うんざりカタカナ料理　メニューも味も単調（白崎記者）	日経（夕刊13面）	82.09.16
“語源”	日経（夕刊4面）	82.10.04
はんらんする外来語（巌谷大四）	日経（夕刊6面）	83.01.29
洋画の日本題は正式統一表記に（白井佳夫）	日経（朝刊第二部2面）	83.02.19
カタカナ社会用語辞典	日経（朝刊28面）	83.03.19
丸谷才一の国語改革批判	日経（朝刊13面）	83.06.12
ことば（赤司俊雄）	日経（夕刊1面）	83.06.20
藤村昌男「外来語実用事典」	朝日（朝刊14面）	83.07.01
なぜ多い英語の歌詞	日経（朝刊28面）	83.08.10
女性なびくカタカナ職業　センスがあれば男なんて！？	日経（夕刊9面）	83.09.01
外来語　高校生のための「現代社会」	朝日（朝刊12面）	83.11.20
外来語乱用に歯止め期待（吹野憲昭）	朝日（朝刊5面）	83.11.29
いま日本語は（2）外来語優遇で危機的状況に　鈴木孝夫氏	朝日（夕刊5面）	84.08.13
氾濫する“行政外来語”	日経（朝刊24面）	84.08.13

いま日本語は（3）外来語増えても構造は不変 阿部公房氏	朝日（夕刊5面）	84.08.20
国語施策見直し一巡，次は外来語表記—今秋にも 次期国語審議会	日経（朝刊30面）	86.03.07
ワープロと拒絶反応　外来語乱用に「昭訓」有効	朝日（朝刊17面）	86.05.27
カタカナ語とまらない，その数ざっと4万語—雑誌・歌詞ぴたりフィット	日経（朝刊9面）	86.08.24
ヴィーナスかビーナスか，外来語表記32年ぶり見直す—国語審，検討へ来月発足	日経（朝刊1面）	86.11.16
外来語の表記を，13年ぶり見直し　国語審で論議へ	朝日（夕刊1面）	86.12.08
17期国語審委員，酒井氏ら45人発令	日経（朝刊30面）	86.12.10
外来語表記で審議会が発足	朝日（朝刊3面）	87.01.15
国語審初総会，外来語見直しスタート—「原音に忠実」どう表記	日経（朝刊26面）	87.01.15
言葉の混乱と誤りを切る（巌谷大四）	日経（夕刊8面）	87.01.26
E電（ことばと世相）（稲垣吉彦）	日経（朝刊32面）	87.05.31
東一と太洋，合併新社名はワールド証券	日経（朝刊16面）	87.06.30
ニアミス（ことばと世相）（稲垣吉彦）	日経（朝刊28面）	87.08.30
日本語細分化—外出語，縄文語……昔と変わる区分（なんでも分類学）（藤原新也）	日経（夕刊8面）	88.02.01
外来語表記，地名・人名にも基準—文部省・国語審が作成へ	日経（朝刊31面）	88.03.25
女性は外来語好き？　減量よりダイエット	日経（夕刊13面）	88.04.14
お役所流カタカナ語はんらん　かなわん	朝日（朝刊29面）	88.05.13
外来語のはんらん検証—首ひねる和製英語，欧米人ほど困惑	日経（朝刊7面）	88.06.29
外来語を巧みに表現，中国語—乱れを心配せず，政府も流入認める	日経（朝刊7面）	88.07.27
外来語表記，緩やかな規範を—国語審，65年度に答申	日経（朝刊30面）	88.12.09
外国人に外来語教える　コンナ辞典作ッテミタ　インドの学者が編さん	朝日（朝刊19面）	89.07.11
7月21日—国語審議会総会など	日経（朝刊3面）	89.07.21
表現力豊かな中国語（わたしの外国語体験）（高橋ゆかり）	日経（朝刊29面）	89.09.23
法令や公文書のよりどころに　外来語表記国語審試案	朝日（朝刊1面）	90.03.02
外来語表記に緩やかな指標　国語審が提案　原音と		

慣用を尊重	朝日（朝刊1面）	90.03.02
(解説) 複雑化した物差し　時代変化に現実的対応　外来語表記国語審試案	朝日（朝刊4面）	90.03.02
国語審議会の「外来語の表記」案　要旨	朝日（朝刊4面）	90.03.02
ワープロは「穏やか」苦手　「うぃすきー」→「ウィスキー」とは行かず	朝日（朝刊31面）	90.03.02
私はこう思う　随筆家の江国滋氏の話　ほか	朝日（朝刊31面）	90.03.02
辞書出版界「大改訂は不要」　外来語表記国語審試案	朝日（朝刊31面）	90.03.02
ビーナス＝ヴィーナス，原音に忠実，慣用も追認―国語審議会，外来語表記試案公表	日経（朝刊1面）	90.03.02
外来語表記，国語審の試案，文部省，教科書検定にも影響―「小中学，混乱の恐れ」	日経（朝刊1面）	90.03.02
外来語の表記，国語審の試案―多様な表現，幅広く認める，「慣用」で論議も	日経（朝刊34面）	90.03.02
水の都ベニスで開いた首脳会談はベネチア・サミットで	日経（朝刊1面）	90.03.04
外来語表記の幅はゆるやかに	日経（朝刊34面）	90.05.22
「外来語わからない」「西洋音楽ばかり」北朝鮮記者の体験	朝日（朝刊6面）	90.09.07
外来語新表記の指導に指針	朝日（朝刊3面）	90.10.23
文部省の会議中間報告，原音に対応の外来語表記，中学校でも使えます	日経（朝刊34面）	90.10.23
外来語　原音でも慣用でも緩やかな表記　国語審が答申	朝日（朝刊1面）	91.02.08
国語審議会の「外来語の表記」答申本文	朝日（朝刊4面）	91.02.08
外来語表記に緩やかな目安，国語審答申―原音・慣用双方に配慮	日経（朝刊34面）	91.02.08
外来語の表記は緩やかに（社説）	日経（朝刊2面）	91.02.09
「ヴァ」「ドゥ」は中学で　外来語表記	朝日（朝刊30面）	91.02.28
外来語表記，小・中・高別に指針―文部省調査会が最終報告，「ヴ」は中学校以上	日経（朝刊34面）	91.02.28
総理府調査，国語「乱れ感じる」74.8%「外来語使われ過ぎ」7割	日経（朝刊34面）	92.09.28
(1) 外来語　カタカナ語　なんでもQ&A	朝日（朝刊5面）	92.09.29
(2) 訳語　カタカナ語　なんでもQ&A	朝日（朝刊5面）	92.09.30
(3) 和製英語・略語　カタカナ語　なんでもQ&A	朝日（朝刊5面）	92.10.01

(4) 表記・発音　カタカナ語　なんでもQ&A	朝日（朝刊5面）	92.10.02
アカデミー・フランセーズ，外来語350語「仏語である」—新辞書で正式認定	日経（朝刊34面）	92.11.15
ことば読本外来語，日本語となるべき語	日経（朝刊21面）	93.03.21
横組み国語辞典出足好調—外来語文化の加速とらえる	日経（朝刊17面）	93.06.06
ビデオが**ビデオ**　リ**ポ**ーターがリ**ポーター**　若者言葉は“しりあがり”	朝日（朝刊26面）	93.06.20
日本語，わかりやすい新分類を	日経（朝刊23面）	94.05.22
海外の日本語熱，脱「国語」を促す	日経（朝刊23面）	94.06.19
外来語	朝日（朝刊25面）	94.06.25
外来語規制—文相"放言"一つの見識	日経（朝刊32面）	94.06.26
？「ヘアヌード」，「ライフライン」？，変な英語，日本ではんらん	日経（夕刊2面）	95.02.22
カタカナの効用	日経（夕刊1面）	95.08.11
外来語の話	日経（朝刊14面）	95.09.17
春秋「大家さん直営24アワー」	日経（朝刊1面）	95.10.30
カタカナの功罪	日経（夕刊1面）	95.11.07
言葉の植民地化防ごう	日経（夕刊2面）	95.11.07
日本語の作法	日経（朝刊14面）	96.08.18
辞書は最高の遊び場	日経（朝刊27面）	96.10.13
伊でも「お役所言葉」改革	日経（夕刊3面）	97.07.19
集中治療学会が造語コンテスト，医療の外来語分かりやすく？	日経（朝刊38面）	97.10.27
生活密着の語源辞典	日経（朝刊21面）	98.05.24
春秋「未消化のカタカナ語」	日経（朝刊1面）	99.03.06